研 究 結 果 報 告 書

所属　山東師範大学
役職　講師
氏名　曲 暁燕

研究結果

テーマ：**東亜同文書院大学の学生の中国山東省における体験**

本研究は近代中日関係史上紛争が多発し、かつ東亜文明発祥の地と見なされた山東省に焦点を当て、上海東亜同文書院の学生は調査中にどんな体験をしたのか、どのように当地の人々と接し、当時の社会をどう見ていたのか、明らかにしようとするものである。

書院生の旅行記や調査報告書などに基づき、分析した結果、次のことが分かった。

第一に、書院生の記録した旅行事情から山東地域像が窺える。孔孟の郷として知られる山東省に憧れの情を持っていたが、儒教思想の廃頽、外国勢力の侵入、社会の立ち遅れ等をリアルに記録した。書院生はさまざまな交通手段を利用し、地域の交通状況の変遷を記録した。膠済鉄道や津浦鉄道などの開通に伴い、大運河や小清河の水運が凋落した。治安が不穏で、特に西山東の匪賊の害により波乱に富んだ旅を体験した。調査の傍ら曲阜を朝拝し、泰山に登り、古典中国の魅力を求めていた。

第二に、前半の旅行調査は大抵地方役所の協力を得て行われ、地方役人と護兵との接触が多く、後半は日本勢力に頼る傾向が見られ、車夫、苦力等以外に、民衆と広く触れ合わなかった。地方役人には温かく招待されたが、一部の留日経験のある役人の「反日」感情に懸念を示し、日本側の反省を呼び掛けた。護兵には安全確保のみならず、雑用までしてもらった。しかし、護兵や車夫などに対等に接することが少なく、差別や偏見を持っていた。なお、懸命に看病してもらった護兵に感謝し、中国人を見直した書院生もいた。

第三に、ドイツなどの欧米諸国の文化浸透や勢力拡大に強い警戒感を持ちながら、「模範植民地」と称え、日本の進むべき方向を心得た。山東省における日本勢力拡大に誇りを持ちながら、粗悪な経営と略奪に苛立ちを感じ、健全で持続可能な開発経営を望んでいた。ある意味で書院生の思想にはアジア主義と帝国主義の二重性格が窺える。しかも、日本の利益のみに拘り、結局、「大陸政策」の色に染められることは免れがたいと言えよう。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）
論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等） 「東亜同文書院学生の中国山東省における体験」曲暁燕『グローバル地域研究』第4号、2024年8月（予定）
書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等） 『近代日本人の山東体験』曲暁燕、日本文化学術出版、2024年9月（予定）